様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２６１５

研究課題名（和文）18世紀ドイツにおける〈人間〉をめぐる言説　―　ヴィンケルマンを手がかりに

研究課題名（英文）Discourse on "Man" in 18th-century Germany - Based on Winckelmann

研究代表者
田邊　玲子（Tanabe, Reiko）

京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授

研究者番号：８０１８８３６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ヴィンケルマンの著作については、『絵画と彫刻におけるギリシア芸術模倣論』三部作に、彫像描写三点、初期の書簡11点を加え、解題を付した翻訳『ギリシア芸術模倣論』を出版、さらに、ジェンダーについてはこの時代のジェンダーをめぐる議論を俯瞰した「ジェンダー」項目（『啓蒙思想の百科事典』）を執筆した。さらに、ヴィンケルマンの時代の18世紀初期ドイツの人間論の媒体として道徳週刊誌『愛国者』を検討をはじめとし、ヴィンケルマンの著作の要素であるユートピア観、「高貴な未開人」のトポス、ギリシア（ヨーロッパ）中心主義、人種差別（黒人奴隷）、といった観点について、他の文学作品をとりあげながら検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
まずヴィンケルマンの著作および書簡の翻訳は、ヴィンケルマンが参照した文献を、邦訳がある場合にはその箇所も特定して示し、綿密な訳註を施し、ヴィンケルマンの背景を日本の読者にも明らかにし、書簡の翻訳や解題では、この時代の生き方や考え方、美術史にとどまらないヴィンケルマンの広範な影響力の一端を示すことができた。『啓蒙の百科事典』の「ジェンダー」項目では、古典古代以来の流れと啓蒙期の変化を、各国事情を越えて網羅的に示した。ヴィンケルマンの著作にさまざな要素を18世紀の広義における種々の文学作品との絡み合わせて考察する研究は他に類を見ず、テキストのアンソロジーを含めた研究書の発表を予定している。

研究成果の概要（英文）：Regarding Winckelmann's works, I have published a translation of the trilogy "Thoughts on the Imitation of Greek Works in Painting and Sculpture" with annotations and an commentary, adding three statuary depictions and eleven early letters and also written an article on "Gender" (The Encyclopedia of the Enlightenment) that provides an overview of the debates on gender in that era. Furthermore, I have examined the moral weekly magazine "The Patriot" as a medium for anthropology in early 18th century Germany, and have examined aspects of Winckelmann's works such as the view of utopia, the topos of the "noble savage," Greco-centrism, and racism (black slaves), taking up other literary works.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学　ヴィンケルマン　人間学　道徳週刊誌　ヨーロッパ中心主義　ヨーロッパ批判　高貴な未開人　黒人奴隷

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景
18 世紀ドイツにおける「人間学」をめぐる研究は、ドイツ文学研究においては、とくに近年の Kulturwissenschaften の観点から絶えず進められてきている。〈心身一体の存在としての人間〉という 18 世紀の人間観の文学作品における反映を扱ったもの、猿と人間との関係をめぐる言説、人間学にもとづく人間の教育を主題とする 18 世紀の文学、18 世紀後半のユートピアと人間学の関連を考察するものなど、さまざまにこの領域の研究が進められている。ヴィンケルマンに関しては、ドイツでヴィンケルマンの歴史批判的注釈を付された著作集が刊行中であるなど、その重要性が再認識されているが、ヴィンケルマン研究は、芸術史や美学との関連やヴィンケルマンという人物をめぐるものが主であり、文化史的観点からヴィンケルマンの影響を検討する研究書もなされているが、19 世紀を対象としている。18 世紀の人間観との関連でヴィンケルマンをとらえ、その受容を位置づけようとする研究は、人間学研究、ヴィンケルマン研究のどちらにおいてもまだ行われていなかった。

２．研究の目的
「人間とは何か」－　これは、いまなお問い続けられている問題である。現代の人間観は、18 世紀ヨーロッパのさまざまな議論や知見に依るところが大きい。本研究では、18 世紀半ばに発表されて熱狂的に受容された、『ギリシア芸術模倣論』をはじめとするヴィンケルマンの著作にあらわれた人間観をいまいちど検討し、18 世紀前半の〈人間〉についての議論および、ヴィンケルマンが依拠した古典古代の文学・哲学がいかに交錯していかなる人間像が提示されたのか、そしてそれが同時代にどのような影響を与えたのかを検討し、ヴィンケルマンの人間像の同時代のドイツ文学（広義での）における受容の様相を明らかにする。

３．研究の方法
(1)まず、ヴィンケルマンの著作が喚起する人間像のさまざまな要素を改めて検討し、あわせてヴィンケルマンが直接参照した、古典古代および近代著作も検討する。この過程において、『ギリシア芸術模倣論』の翻訳を出版した。
(2)18 世紀前半の人間学にかんする議論を検討し、(1)との交錯を考察する。この過程において、『啓蒙の百科事典』の項目「ジェンダー」を執筆した。
(3)18 世紀におけるヴィンケルマンの受容を確認しながら、(1)(2)で明らかになった点との関連を検討する。
(4)代表的なテキストの翻訳を含めた研究書をまとめる。ただ、18 世紀のテキストは調べることが非常に多いうえ、コロナ禍でのオンライン授業対応により完全に研究が中断されたうえ、ドイツ渡航ができず資料収集がかなわなかったことなどによる停滞がある。

４．研究成果
(1)ヴィンケルマン著『絵画と彫刻におけるギリシア芸術模倣論』出版
1755 年に出版された『絵画と彫刻におけるギリシア芸術模倣論』は、ヴィンケルマンの名を一躍有名にし、仏語訳も出版されるなどして、広くヨーロッパでヴィンケルマンの名を知らしめるきっかけとなった。その後ヴィンケルマンはローマに移り住み、『古代芸術史』をはじめ、ドイツ語のみならずイタリア語やフランス語でも古代芸術や遺跡発掘についての数々の著作を発表し、ヨーロッパにおいてこの時代の芸術論を牽引する存在となり、その影響力は計り知れない。この著作の翻訳は本科研以前から取り組んでいたことではあるが、本科研との関連で、ヴィンケルマンが参照した古典古代や近代の著作の確認を行い、原註、訳註に活かした。さらに、当時大きな影響力を持った彫像描写三点および、この出世作の執筆・出版に至るまでのヴィンケルマンの生および考え方を跡づけるために、書簡 11 点の翻訳を加え、全体の解題をつけ『ギリシア芸術模倣論』として出版した。『絵画と彫刻におけるギリシア芸術模倣論』は三部作からなるが、一般書として出版された邦訳は第一部のみ、澤柳大五郎による 1943 年の翻訳があるが、日本語が難解であるうえ、註も不十分である。また、残りの二部については、『帝京大学外国語外国文学論集』に連載された尾田一正訳があるが、原註は原書の略号をそのまま記すにとどめている。三部作をまとめ、ヴィンケルマンの原註では略号で記されている古典古代や近代の著作を、2016 年にドイツで出版された史的批判版著作集に基づいてすべて明示したものは、本邦初である。原註および訳註で、ヴィンケルマンの参考文献で邦訳があるものは当該書の該当頁まで示し、ヴィンケルマンの思想的背景を日本の読者にも詳らかにすることができた。彫像描写については中山典夫訳『古代美術史』（中央公論美術出版、2001 年）所収のものもあるが、新たに訳し直した。さらに書簡の翻訳は本邦初である。また解題では、あまり知られていないヴィンケルマンの生涯を概観し、美術史や芸術論にとどまらない、ヴィンケルマンの広範な影響力をその一端でも把握できるよう、文化史的・人間論的観点から、この著作の意味と影響について述べた。ヴィンケルマンについては、美術史、芸術論、美学、といった領域での研究は日本でもなされているが、より幅広い観点からの論は、本研究の独自性を示すものである。

(2)『啓蒙思想の百科事典』における第３部第１章「啓蒙とは何か」項目「ジェンダー」
18 世紀ドイツの人間学を研究するうえで、ジェンダーの観点を外すことはできない。古典古代以来、身体的性差に対する意味付与として、男女を優劣関係（プラトン『ティマイオス』、ガレノス：身体の完全性の差）で捉えるジェンダー観（トマス・ラカー：「ワンセックスモデル」）がヨーロッパでは伝統的に受け継がれてきた。しかし理性のもとあらゆる人間は自然により平等だと考える啓蒙思想のもと、ジェンダー秩序を新たに定義し直す必要が生じ、さまざまに議論されることになる。それに先立ちルネサンス以来、女性の学識能力を巡る女性論争が戦わされ、17 世紀には魂の無性と両性の平等を主張する論（プーラン・ド・ラ・バール）も生まれた。いっぽうロックやヒュームは男女の優劣は自然に定められていると、従来の秩序を踏襲していた。平等を保証すべき「自然」が不平等の根拠とされる矛盾におちいっていたわけだが、そこからの脱却法を提示したのがルソーの『エミール』第五編である。そこでは男女の二つの性の相違は比較不可能であり、別の使命に従って自然の目的に向かっているのであり、男女の優劣や平等についての議論は無意味だとする。そして身体的性差をもとに、強く能動的／弱く受動的、という相補的対極で男女をとらえる補完的二元論、ラカーの言う「ツーセックスモデル」が導入された。従来の「全き家」では身分概念であった家父と家母の役割分担が、性に内在する性格に読み替えられ、たとえばシラーの詩『鐘の歌』のように、男女の役割分担が補完的「性の性格」（カリン・ハウゼン）および徳として喧伝され、教育にも影響を及ぼす。他方、ウルストンクラフト、コンドルセなどによって男女の権利と教育の平等が主張されもした。性愛にかんしては、キリスト教は同性愛を禁じ、近代初期のヨーロッパでは、ソドミーは死刑で法律で定められていたが、「人間」を世俗的に理解しようとする啓蒙思想は、現実に存在する同性愛の理解は難題であったが、「社会的あるいは心理的原因をもつと考え」「社会と道徳の改革がなされれば問題は根絶できる」として、ベッカリーアは「ソドミー無罪論を打ち出した」（マイケル・シバリス）。シバリスは、これを「重要な知の進歩」と評価するが、〈正常な〉異性愛への矯正を含み込んでおり、補完的ジェンダー観によって強化された強制的異性愛の枠組みを結果的に補強することになる。総じて 18 世紀は、同性愛の実践にかんしては、ヴィンケルマンがそうであったように、個人的嗜好の問題として寛容であったが、補完的二元論に基づく、セックス・ジェンダー・セクシュアリティの一貫性が、以後強固な枠組みとなる。
事典の項目で紙幅の制限があるため書けたことには限りあるが、古典古代以来の流れと啓蒙期の変化を、先行研究を踏まえながら、各国事情を越えて、イギリス、フランス、イタリア等の議論を網羅的に示したことが大きな特徴である。なおジェンダーにかんしては、紙幅の都合で書けないが、以下であげる領域でも扱っている。

(3)「人間」への教化：道徳週刊誌『愛国者』Der Patriot
ドイツ啓蒙の父と言われるクリスチアン・トマジウスは 1692 年刊の『幸福で、礼儀正しく、満足した生に達する唯一の道としての、理性的かつ道徳的に愛する術、あるいは、道徳教説入門』（ドイツ語版８版、ラテン語版 1706 年１版のみ）で、人間には三種類あると述べている。すなわち、非理性的人間／獣；人間／賢明で徳ある人々；敬虔なキリスト者、だという。ほとんどが非理性的人間／獣の状態にあり、人々がこの状態を脱し、本来の人間になることができるようにこの書を書いた、と言う。このように「人間」を定義し直して、あるべき人間への教化が 18 世紀の旗印となった。ドイツで大きな役割を担ったのが、「道徳週刊誌」と総称される定期刊行物である。イギリスのスペクテイター、タトラーといった日刊紙を範とし、1720 年代に入って続々と発刊され、1740 年頃には「道徳週刊誌」と総称されることになった、定期刊行物群である。ドイツ語圏では 1800 年までに発刊された雑誌のうち 83 誌が狭義の、103 誌が広義の「道徳週刊誌」とされている。ほとんどが 1720 年から 1760 年までの期間に、雨後の竹の子のように各地で続々と発刊され、発行期間は数年と短命で、週一回（例外的には週二回）発行、発行地はほとんどが北部、中部ドイツ、スイスといった、プロテスタントの地域であった。その後 1770 年代から 80 年代にかけて、衰退の一途を辿る。すなわち、啓蒙期という時代に限定された現象であった。その多くはタイトルとなっている人物が「私」という一人称で読者に直接語りかけ、身分や地位とは無関係の、人間＝理性を持つ存在の徳と悪徳を語り、あるべき人間像を浸透させ実践させることを目的としていた。
『愛国者』Der Patriot とはそのなかの最初期のものの一つで、1724 年 1 月 5 日から 1726 年 12 月 28 日まで毎週、計 156 号がハンブルクで発刊され、発行部数は 1724 年 9 月 1 日の第 36 号によれば、約 5000 部と、当時としては破格であった。1726 年の終刊後は、改定が加えられた合本が 1728／9 年から 1765 年まで計 4 版出版されたほか、非合法の完全復刻版やオランダ語翻訳版が出されるなど、人気を博した。そのなかで、「人間」について、「もし人間を知性 Verstand があって自らの知性を用いる被造物、と考えるなら、人間の数はそれほど多くない。」（1725 年 1 月 11 日、第 54 号）と、「人間」たるにふさわしい状態にいる人は少ないとしている。しかし「人間で最良のことは、変われること」（1724 年 10 月 11 日、第 41 号）であり、変化にもさまざまな方向性があって、それを決定するのが、理性、そして良心である、という。「理性的あるいは非理性的に変わるかどうかで、良い方向にも悪い方向にも変わる。理性と良心にしたがうなら、理性的に変わるし、理性と良心よりは欲望や空想にしたがうなら、非理性的に変わる」（同上）。「良い方向」と「悪い方向」、この善悪の基準を、理性は備えていることになる。その方向性を

定める助けとなるのが、『愛国者』が自らに課した使命である。その最終目的は幸福の追求であり、「［人間］の幸福は、善き方に変身することに存する」（同上）。

(4)ヨーロッパ批判とヨーロッパの相対化
①『愛国者』のコスモポリタニズム・平等・文化相対主義
『愛国者』は第 1 号で、発刊者であり執筆者として「愛国者」を名のる「わたし」が自己紹介をする。オーバーザクセン生まれのハンブルクで育ちの 58 才、「世界中を祖国と、いや、ただひとつの都市とみなし、自らをあらゆる人間の親族もしくは同胞とみなす者である」という。このように世界市民を自任する「わたし」の基盤は、世界遍歴にある。「現在使われている 19 の言語」を習得し、「7 年間を、ヨーロッパ大陸でももっとも名高いさまざまな民族のもとで暮らした」。さらに約 20 年をかけて、「ラップランド人、グリーンランド人、タタール人、モルッカ人、インド人、中国人、日本人、ムーア人、それどころか、ホッテントット人や人食い人種のもとへまで」赴いたという。そこで得たのは、「ひどく単純で未開の状態にあると思われていた同胞たちの、賢明さや愚かさ、美徳や悪徳、法や秩序や慣習などを知ったばかりでなく、高慢なるヨーロッパ人のなかにはこれほど完璧な例は見つからないだろうと思われるほどの、理性的で徳高い人びとにも出会った」と、異国の文化や人間を「ひどく単純で未開」だと見下すようなヨーロッパ人を「高慢」だと断罪し、相対化している。その相対化の鍵は、「法や秩序や慣習」といった文化、そして何よりも個々人の「理性」と「徳」であり、これが普遍的価値基準となる。後述する「高貴な未開人」の「高貴さ」も、「理性」や「徳」の発現たる普遍的人間性によって評価されたものである。
さらには『愛国者』は、「身分や性や年齢など」にかかわらず、誰をも自分と「同等の者とみなして何の分け隔てもなく友とする」という、すべての人間の平等観が根底にある。

②ユートピア　―　堕落したヨーロッパと新たな秩序、それからの解放
18 世紀前半、三つのユートピア小説がドイツ語で発表された。ルードヴィヒ・エルンスト・フォン・ファラモント（フィリップ・バルタザール・ジーノルト・フォン・シュッツの偽名）著『世界で一番幸福な島、あるいは充足の国。その国の統治法、状態、豊穣、住民の風俗、宗教、教会の体制など、この国が発見された経緯を含めて』（1723）、ヨハン・ゴットフリート・シュナーベル著『数人の船乗りの数奇な運命［…］』（1731、1827 年にルードヴィヒ・ティークにより短縮版が『フェルゼンブルク島』と解題されて出版される）、ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ著『クリスチアノポリス』（1741）である。ただし『クリスチアノポリス』はすでに 1619 年にラテン語で発表されていたもののドイツ語訳であるが、ドイツ語訳によってはじめて、学識層以外の一般読者にとって受容可能となったといえる。その意味ではこの小説も 18 世紀の出来事だと考えることができる。これら三作の出発点は、ヨーロッパの堕落である。最初の二作は敬虔主義、『クリスチアノポリス』はルター派、という宗教的立場が濃厚で、当時のヨーロッパを道徳的堕落、封建身分制による抑圧と搾取の構造でとらえ、その反転世界としての理想的国家・社会が描かれる。それは、キリスト教倫理に基づく厳格な家父長制規律社会であるが、そこに、キリスト教倫理にしたがった理性と徳のみを人間の価値規準とする社会の、封建身分制から解放された「自由」が見いだされた。
対してヴィンケルマンは、古代ギリシア社会を、上記のような規律が推し進められた「市民道徳」にとらわれず、（男性）市民がみな、のびやかに自らの心身を鍛錬し、能力を展開できた、自由と平等のユートピアとして提示している。ヴィルヘルム・ハインゼの『アルディンゲッロと幸福な島々』（1787）は、それをより具体化してみせた作品といえる。その意味ではヴィンケルマンは、新たな「ユートピア」観をもたらしたともいえよう。

③ヨーロッパ人の強欲と非人間性
ⅰ)高貴な未開人　―　「インディアン」
ヴィンケルマンの『絵画と彫刻におけるギリシア芸術模倣論』には、ホメロスが描く英雄の肉体をイメージするために、いささか唐突に「インディアン」が引き合いに出される。肉体の面に限られてのことだが、逆に、ギリシアの英雄の崇高が、インディアンに重ね合わされるという効果を生んでいる。ホープの『人間論』の「インディアン」は、西欧の知に染められていない、無学ではあるが純朴な崇高な姿である。アメリカ大陸の「インディアン」は、ヨーロッパ人の視点からは、未開／野生／野蛮人と見なされてきた。先述のように『愛国者』は、「未開人」を見下すようなヨーロッパ人の高慢を指摘していたが。18 世紀には、ヨーロッパの人間性堕落の鏡として、未開であるがゆえに本来の人間性が損なわれていないとして、「未開人」の崇高性が称揚された。いわゆる「高貴な未開人」のトポスである。ドイツでは、イギリスの『スペクテイター』1711 年 3 月 13 日付け第 11 号に掲載されたインクルとヤリコの逸話が、クリスチアン・フュルヒテゴット・ゲラートの物語詩『インクレとヤリコ』（1746）を皮切りに、世紀末まで何度も作品化された。さらには、ヨハン・ゴットフリート・ゾイメが 1782 年に到着したカナダ・ハリファックスで聞いた話をもとにした『未開人の男』も有名である。本研究ではそのほか、先行研究を検討するなかで発見した作者不詳『未開のアメリカで自らの未開性から解放されたヨーロッパ人［…］』（1756）、ヨハン・ヴィルヘルム・ローゼ『ポカホンタス』（1784）の二作も検討した。
ⅱ)黒人奴隷と「人間」の平等

a)黒人奴隷を正当化する言説
ヴィンケルマンが提示したギリシアの理想的人間像は、後述するギリシア（ヨーロッパ）中心主義とも相俟って、黒人奴隷を正当化する言説にも影響を及ぼしている。解剖医サミュエル・トーマス・ゼンメリンクは『ムーア人とヨーロッパ人の身体的相違について』（1784）を著し、オランダの解剖学者カンペルを引き合いに出しながら、黒人の頭骨は、ギリシアの最高の美の理想が示す頭骨（＝ヨーロッパ人の頭骨）の形から逸脱しており、黒人はヨーロッパ人と猿との間に位置し、ヨーロッパ人より劣っている、と主張し、ヨーロッパ人の残虐に苦しむ黒人奴隷の状況に心を痛める振りをしながらも、奴隷制を正当化する。なおゼンメリンクは、ギリシアの彫像をもとに、女性のウェストを細く締め上げるコルセットが女性の健康を損なうとしてコルセット反対論を発表した人物でもある。

b)黒人奴隷制を批判する言説
1789 年、ヨハン・エルンスト・コルプ編著『黒人奴隷の風習と運命についての物語集。善良な人々のための感動的な読み物』が出版される。それに触発されてヘルダーは、『黒人たちの牧歌』を書き、黒人奴隷が置かれた過酷な状況やヨーロッパ人の残虐、奴隷でありながら人間性の矜持を失わない黒人の姿、奴隷解放を進めるクェーカー教徒などについて語る。これは『人間性促進のための書簡』(1793-95）の一部であるが、このなかでヘルダーはヨーロッパの文化覇権主義を批判し、文化相対主義の立場をとっている。

c)「高貴な黒人」の物語
黒人を主人公としながら、ｉ）の「高貴な未開人」の範疇には属する小説も書かれている。アフリカからヨーロッパに連れてこられた男女二人の黒人の子どもの物語が、作者不詳『理性的な素朴』(1766）である。ヨーロッパで育てられ、教育を受け、理性を磨きながらも、「未開人」としての素朴さを失わない。「奴隷」ではない黒人を主題とした作品である。さらには、前項のコルプ編著書には、犯罪者となった逃亡黒人奴隷の物語もあるいっぽう、「高貴な黒人」というタイトルが付された物語も収められているほか、ヨーロッパ人の残虐とは対照的な、「高貴な未開人」としての黒人奴隷像も多々描かれている。そのなかで、人間性に優れ、体格に秀でた美しい黒人の若者が、ベルヴェデーレのアポロ像やアンティノウスの彫像に比され、それどころかそれ以上だという描写もあるなど、ヴィンケルマンの影響が認められる。

(5)ヴィンケルマンのギリシア（ヨーロッパ）中心主義・「普遍」の差別性
『古代芸術史』でヴィンケルマンは、ギリシアが極寒と酷暑との中心にあり、知性や気質や肉体などすべての点において最も完全な人間を生む地だと考える。その中心から外れるほど、人間は不完全となる、ということになる。人間の姿形については、教養があるならば、ヨーロッパ人のみならず、アジア人やアフリカ人も認める普遍的な形があると主張し、ギリシアの美を普遍とする。さらに、目鼻立ちが動物と類似するほど人間本来の顔から逸脱する、と、「中心」から離れた地域の人々と動物との類似性を持ちだしている。ヴィンケルマンのギリシア中心主義の中心は、あくまでもギリシアであり、たとえばより北方に位置するドイツはより劣る、としていたが、ヴィンケルマンが受容されるなかでギリシアとヨーロッパが同一視されるようになり、また、アジア、アフリカはヴィンケルマン自身が中心からの逸脱としているだけでなく、肌の色は「白」が理想であるとすることで、その他の肌の色の価値を貶めているため、人種差別が潜在している。

期間内に出版公表ができた(1)、(2)の二点は、以前から行ってきた継続的研究に本科研研究を合わせたものになる。(3)以下については、発表準備中である。なお、ヴィンケルマンが参照した古典古代の著作については、翻訳においてそれらを明らかすることで精一杯で、18 世紀ドイツの人間学との関連性にまでは、とても手が回らなかった。

〈参考文献〉（全体では膨大な数になるため、記述の依拠度が高い二次文献数点に限る。）
４(2)
シバリス、マイケル著「啓蒙と革命の時代の男性同性愛〈1680-1850〉」R．オールドリッチ編、田中英史・田口孝夫訳『同性愛の歴史』東洋書林、2009 年、103-123 頁。
ラカー、トマス著『セックスの発明――性差の概念史と解剖学のアポリア』高井宏子・細谷等訳、工作舎、1998 年
Hausen, Karin: Die Polarisierung der "Geschlechtercharaktere". Eine Spiegelung der Dissoziation von Erwebs und Familienleben. In: Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas. Neue Forschungen. W. Conze (Hg.), Klett, S. 363-393.
４(3)
Martens, Wolfgang: Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften. Stuttgart (J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung), 1968/71.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 ヴィンケルマン、田邊 玲子	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 480
３．書名 ギリシア芸術模倣論	

１．著者名 日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 714
３．書名 啓蒙思想の百科事典　　項目「ジェンダー」144-147頁	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関